

# ウイリアム・カーロス・ウイリアムズにおける人種表象

江田 孝臣

## (序)

アメリカ詩における人種表象を論じる場合、一九八八年に出たオールドン・リン・ニールセンの『人種を読む——二十世紀の白人アメリカ詩人と人種言説』を避けて通ることはできない。ウイリアムズについては、その第三章「モダニズム」で、作品全般に見られるステレオタイプカルな黒人表象を論じている。とくに、フレッド・ミラー、リディア・カーリンと競作した未完の小説『マン・オーキッド』を大きく取り上げている。短詩と長篇詩『パタソン』については、その黒人女性表象を問題にしている。例えば、有名な「黒人の女」<sup>2</sup>を次のように評している——

「黒人の女」は、前述したスタインにおける原初的な人間と

しての黒人という考えを引き継いでいる。この黒人女性は全身これ運動であり、何ら思案している風ではない。彼女はもうひとつの世界から派遣された「大使」であるが、自分の使命には気づいていない。それは白人の詩人の存在によって初めて明らかになるような使命である。彼女が予告するもうひとつの世界は二色のマリゴールドの世界であり、これこそ、違った「色合い」を自分の詩の風景に好んで持ち込むことによつてパウンドが提唱する主題の、また別の再表明でなくて何であろう。腿が太すぎてよちよち歩くという記述は、明らかに、ウイリアムズが心に抱く「カファー」美人の一例である。<sup>3</sup>

この一節には、先行するガートルード・スタインとエズラ・パウ

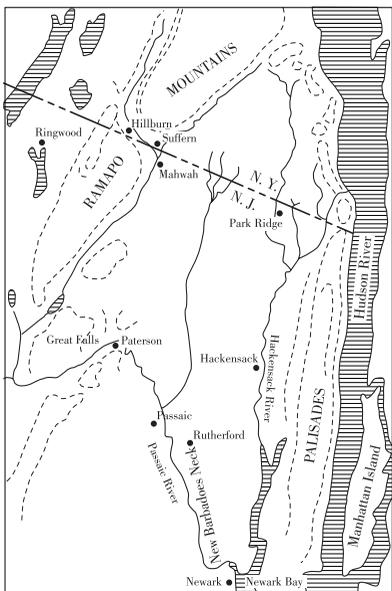
ンドを論じた部分が前提とされている。ニールセンはその「序章」で、とくに小説『メランクサ』を念頭において、「スタインの黒人への関心」について、「白人でない人間は歴史を持たない存在であり、自分たち自身の芸術も持たない、という見解の影響を脱していない」<sup>4</sup>と述べた後で、「スタインの語りは、きわめて多くの白人の書きものと同様に、黒人アメリカ人から歴史と芸術と歌を剥ぎ取り、彼らの反論に耳を貸そうとはしない」<sup>5</sup>と付け加えている。パウンドに関しては、主に『ピサ詩章』に登場する黒人（米兵）の表象について、「しかし、パウンドはしばしば、白人でない人間と彼らの話し言葉を、彼の詩の風景を飾るローカル・カラーとして利用している」<sup>6</sup>と断じている。つまりウィリアムズを論じた一節でニールセンが何を意味しているかといえば、ウィリアムズも、スタイン同様、黒人を自らの文化と歴史を持たぬ存在と見なし、パウンド同様、詩を彩るエグゼティックな「色合い」として用いているに過ぎない、ということである。ニールセンはこのような白人の黒人観を、「白人の作り出した神話を想像上の他者の空間へ投影する現象」あるいは「原罪以前の真正性ととの遭遇の一種」<sup>7</sup>といった心理学的な用語で一般化している。なるほど人種偏見の心理学としてはこの通りかもしれないが、ウィリアムズの詩を心理学だけで説明しようとすれば、あまりに多くのものが抜け落ちることは明らかである。

私見では、ウィリアムズにとって、回帰すべき「神話」ある

いは「真正性」なるものがあるとすれば、それは原罪以前に存在したものでなく、また無意識の底に封印されたものでもない。それは、『パタソン』におけるハミルトンのなものの対極にあるもの、産業主義以前のジェファソンの田園に存在したと詩人が「夢想する」ものである。言い換えれば、貨幣が貨幣を生み出す金融資本主義、パウンドの文句を借りれば「美」が市場で判定される「市場経済社会、あるいは詩人や芸術家が疎外された産業至上主義的アメリカの対極にあるものである。このことを、ジャクソン・ホワイツを扱った「エルシーに」と『パタソン』第一巻、第四巻によって、論じてみたい。ジャクソン・ホワイツはニュージャーシ北部のエスニック・エンクレイヴに住む混血集団であるが、ニールセンの本では取り上げられていない。

(1) 「ハンニー」(“To Esie”)

一九二三年の『春など』初版では表題はなく、XVIIIというローマ数字が振られている作品である。一九三四年刊行の『詩集』、一九二一年～一九三二年」で、「エルシーに」(“To Esie”)の表題が付せられた。三行一連で、計二二連の比較的長い詩である。VIII番の詩「六月の蛇口」(“At the Faucet of June”)において微かに暗示された産業主義と金融資本主義による田園的



アメリカの陵辱の主題に、「エルシーに」<sup>8</sup>ではより明確な表現が与えられている——

### XVIII

The pure products of America  
go crazy——  
者たちが／狂っていく——

mountain folk from Kentucky  
ケンタッキーの山の民

or the ribbed north end of  
あるいは山がうねり

Jersey  
湖や溪谷が

with its isolate lakes and  
点在するジャージー北端の

valleys...  
山の民……

冒頭の“The pure products of America”は、「工業製品」に引掛  
けながらも、人間を意味している。この“pure products”の例と  
して、「ケンタッキーの山の民」の他に、「ジャージー北端の山  
の民」が挙げられている。後者は、『パタソン』第一巻にも登場  
するジャクソン・ホワイツ、あるいは今日「ラマポの山の民」  
と呼ばれる人々である。一九九四年刊のデイヴィッド・ス  
ティーヴン・コーエン著の『ラマポの山の民』によれば、  
ニューヨーク州と境を接するニュージャージー州北端のラマポ

地方の町マーワー (Matwah)、リングクウッド (Ringwood)、そしてニューヨーク州側のヒルバン (Hillburn) を中心に分布している。彼ら自身はジャクソン・ホワイツという呼び名を蔑称として嫌っている。かつてはラマポー山地の中に小さな集落を作って、周辺の文明とは隔絶した暮らしを営んでいたが、一九二〇年代以降、多くの人々が孤立した山の生活をやめ、近隣の町に移り始めた。外見上は黒人と区別がつかないが、興味深いことに山の民自身は自分たちを黒人とは思っていない。かえって南部出身のアフリカ系アメリカ人を蔑視する傾向が強く、むしろ白人に親近感を持っている。(これはゾラ・ニール・ハーストンが『わが馬に告げよ』で報告している一九三〇年代のジャマイカのムラトリーの、黒人と白人に対する態度と類似している<sup>10</sup>)。ラマポーの山の民には白子が多く、白人で通っている人々もいる。彼らは黒人と見られるよりは、むしろインディアンと白人の混血と見られる方を好み、一九八〇年代初めには、「ラマポー・インディアン部族法人」なる組織をつくり、州議会にインディアンの一部族として認めるよう申請している<sup>11</sup>。この山の民については、さまざまな伝説が語り伝えられ、ピュリツァー賞受賞者を含む多くのジャーナリストや作家が取り上げてきた。これらの人々の由来に関しては、後述するように、コーエンが反駁したい証拠によって明らかにしている。「エルシーに」の理解にとつて重要なのは、ウィリアムズがこの山の民をどう見ていたかである。それは第三く五連に見て取

れる。ここに、ある種の少数民族に対する紋切り型で、偏見に満ちた見方が含まれていることは明白である。「聾啞者」(“is deaf-mutes”) が多いというのは、隔絶された生活のために部外者との接触に慣れないことが生み出す誤解であろう。しかし、「盗賊」(“thieves”)、鉄道敷設の出稼ぎに出る男たち (“devil-may-care men who have taken / to railroading / out of sheer lust of adventure”)、そして「月曜から土曜まで／汚れに／まみれた自堕落な若い女たち」 (“young slatterns, bathed / in filth / from Monday to Saturday”) は、山の民の困窮した経済状況を幾分かは反映しているだろう。「盗賊」に関しては、独立戦争中、この地方にクローディアス・スミスという男を首領とする「ラマポー山地のカウボーイ」あるいは「ラマポー山地の疫病神」と呼ばれる盗賊団が跋扈していたという記憶と関係があるだろう。ホイットグとトリーリーの区別なく襲ったため、どちらにも恐れられている。サファン (Suffern) 北部のマウント・トーン近くの「スミスの峡谷」と呼ばれる谷を根城にしていた<sup>12</sup>。

男たちは、貧しいがゆえ、最下層のアイランド移民に混じって大陸横断鉄道等の建設に携わるほか、生きる道がなかったというところであろう。「汚れにまみれた」女たちの「汚れ」 (“filth”) は何を指しているのだろうか。山の中の泥土にまみれた重労働の毎日とも取れなくもないが、「自堕落な若い女」 (“slatterns”) は身を売って暮らす日常のことを暗示しているのかもしれない。いずれにせよ「その夜」 (“that night”) すな

わち土曜日の夜だけが彼女らの自由になる時間である。それに続く部分(“to be tricked out that night / with gauds / from imaginations which have no // peasant traditions to give them / character”)にはいくらか曖昧さが残る。例えば“to be tricked out with gauds”というのは「安物の装飾品で身を飾る」という表現だが、“to be tricked out”は「騙されて誘い出される」とも解し得る。ここではそれに“from imaginations”が続き、読み手を混乱させるが、いずれにせよ、“from”は“away from”と同義であり、したがって「想像力から引き離される」と解釈する他はないと考える。

山の中にはその想像力に「際立った特徴」(“character”)を与えるような貧農の伝統もなく、むしろそれから引き離されてしまう。この「伝統がない」という憶断は、ニールセンが指摘する、黒人を歴史を持たぬ存在と見がちな白人側の偏見とも言えよう。安物の装飾品で誘き出された(あるいは身を飾った)彼女たちは、贈物をくれた男たちに「ヤマザクラかガズミの／生垣の下で／麻痺した恐怖以外／何も感じることなく／屈伏する——／彼らにはそれを言い表すことはできな——」(“succumbing without / emotion / save numbed terror // under some hedge of choke-cherry / or viburnum — / which they cannot express—”)

この複数形の“imaginations”とはいったい何か。後段には単数の“imagination”が出てくるが、これは明らかに詩的想像力を指す。「春など」は散文と抒情詩が交互に配された体裁を取っているが、その散文部分は、この詩的想像力についての考

察である。それとは異なるものとして、この複数形の「想像力」は、人間が(自堕落な若い女たち)であれ)生来持っている想像力の「原石」と言っても、それは詩才というよりは、ある種の「真実(むろん詩人から見た「真実」)を見抜く「勘」あるいは「明察」と呼ぶべきであろう。ニールセンは前述の「人種を読む」において、ナンシー・キュナード編のアンソロジー「ニグロ」(一九三四年)に収録されたウィリアムズの散文「パッセナクの若い黒人女たち、昔と今」(“The Colored Girls of Passenack — Old and New”)における人種偏見を論じているが、一方でこの散文作品は、ウィリアムズが黒人女性のなかに、どのような資質を見出していたかを教えてもくれる<sup>13)</sup>。ウィリアムズは「今日の若い黒人女」について次のように述べる——「彼らの多くは例外的に高雅な顔立ちをしている。そして彼らの振舞いに見られる快活さ、そのなさ(“awariness”)は、白人には提供できないサーブスである。今日の白人の若い女は、快活この上ないときの黒人の若い女に比べれば、売れ残りの商品の如きものである。黒人の若い女は、「美德」に含まれるはずの精神の素朴さを持つてゐる」<sup>14)</sup>。また、近所の往診先で応対に出た、自分より長身の銅褐色の堂々たる黒人女性に対してウィリアムズが感じた圧倒的な魅力や、言葉の選択に苦心しながらも「陰鬱な注意深さ(“attentiveness”)を持ち、なかなかの生氣にあふれていた」と表現し、その資質をさらに詳しく「彼女の硬さ、筋力、

若さ、真剣さ、彼女の現実感と対になった彼女の精神の機敏さ (“alertness”)<sup>15</sup>と分析している。同時に、それがウィリアムズにとつて、それまで出会ったことのない種類の性的魅力であったことは、「彼女の力強さ」 (“the force of her”) が、「その場で新しい種族を創造したいという欲望を起こさせた。そういう力強さにそれまで一度も出会ったことがなかった」<sup>16</sup>と述べていることから分かる。ウィリアムズがここで黒人女性に見出している美質すなわち “awareness,” “attentiveness,” “alertness” は、「春など」の散文体の詩論においてウィリアムズが繰り返し強調する想像力発動の前提をなす精神的能力である。

山の民の暮らしに倦んだ女たちは、ふもとの豊かな生活に憧れる。二十世紀になってから、山の民の暮らしと、ふもとの人々との生活格差はますます広がっていった。第一次世界大戦後のアメリカの好景気のお陰で、町に出れば仕事はいくらでもあっただろう。そして長年山に住み続け、都市文明あるいは資本主義経済に免疫を持たないこれらの人々が、もつともこのような誘惑の犠牲になりやすい。想像力なきゆえに都市文明の犠牲となった山の民は、同時に、想像力なきゆえに、その自らの悲劇を「言い表すことできない」 (“cannot express”)

ところが興味深いことに、インディアンの血の混じった結婚から生まれた子供なら話は別だという——「しかし多分インディアンの血の／混じった／結婚となれば話は別。／その結果、疫病と／殺人ばかり見て育った／少女ができあがり」 (“Unless

it be that marriage / perhaps / with a dash of Indian blood // will throw up a girl so desolate / so hemmed round / with disease or murder”)

こ)にもある種の人種偏見を見るべきであろう。原文の “throw up” には「偉人を生み出す」という意味があるが、ここではアイロニーをまじえた用法であろう。その結婚の結果、自らの悲劇を「言い表す」ことのできたいような人物が出来あがるという訳である。これがこの詩の主人公エルシーである。山の中の悲惨な生活の中で「疫病と 殺人ばかり見て育った」彼女は、州の役人に救い出され、孤児院で養育され、やがて十五歳でニューヨーク郊外の医師の家に働きに出される (“... that she // be rescued by an / agent — / reared by the state and // sent out at fifteen to work in / some hard-pressed / house in the suburbs — // some doctor's family, some Elsie—”)。

エルシーはウィリアムズの家で働いていた実在の知恵遅れの子守女をモデルにしている。ウィリアムズの『自伝』には、サディーという子守女が、主人ウィリアムズの歓心を買うために自作自演で強盗の被害者を装う話が出てくるが、このサディーも同じ実在の子守女に基づいているらしい<sup>17</sup>。サディーもエルシーも、同じ子守女の愛称であろう。「ヴォイシズ・アンド・ヴィジョンズ」 (“Voices and Visions”) という教育用ビデオシリーズのウィリアムズの巻で、この女性の写真を見ることができ、外見はまったくの白人である。また『自伝』第三十八章冒頭には、ヴァーモントへの家族旅行に伴った際に、エル

シーが小川で水浴びをし、農夫たちが作業の手を休めて眺めていた、という記述がある。

ヴァーモント州ヒルデイルで夏を過ごした時に見た恐るべき光景を、私は思い出すことができる。背が高く真っ白の知恵遅れのエルシーが榛の木に囲まれた谷底の小川で水浴びをしていたのだが、丘の中腹の離れたところにある畑で乾草作りをしていた男たちが手を休めて、彼女を眺めていたのだ。<sup>18</sup>

「背が高く真っ白の」は、一義的には、遠くからも彼女の（全裸の）姿が目立ったことを言っているのだろう。だが、「恐るべき光景」と後に回想しながらも、実は、農夫たちと同じ眺めをずっと近くから享受しながら、人種的出自にもかかわらず真っ白なエルシーの肌の色に、あらためて驚嘆しているウイリアムズを想像するのは、深読みが過ぎるであろうか。

さてこのエルシーには、他の山の民と違って、「表明する」(“express”) 能力があるという。だがそれは言葉による表現ではなく。「壊れた脳味噌」(“broken / brain”) のエルシーは、「なまめかしい水」(“voluptuous water”) と形容される「巨大な／不格好な尻とゆめゆめ上下する乳房」(“her great / ungainly hips and flopping breasts”) によって、「われわれにこの真理を」(“the truth about us”) 「表明する」(“expressing”)。彼女の「目当ては安物の／宝石と／すてきな瞳の金持ち青年」(“addressed to

cheap / jewelry / and rich young men with fine eyes”) であって、自分が住み込みで働いているような郊外の「ひっ迫した」町医者者すなわちプチ・ブル風情には鼻もかけない<sup>19</sup>。おそらくはニューヨークのエリート青年とのロマンスと結婚を夢見る彼女にとっては、ラザフォードの小市民の生活は、ラマポー山中の悲惨な生活と大差のないものとなる——「あたかもほくらの足元の／大地が／空の排泄物であるかのように」そしてほくら墮落した四人どもは／飢餓を／運命づけられ、やがては汚物を食い出す始末」(“as if the earth under our feet / were / an excrement of some sky // and we degraded prisoners / destined / to hunger until we eat fifth”). これが、エルシーが表明する「われわれについての真理」なのだが、ここで詩人があえて「真理」(“truth”) という語を使っていることは興味深い。おそらくは、ニューヨークのエリートたちに比べれば、町医者 of 暮らしなどは、山の民と大して違わないという認識を、詩人自身もいくぶんか共有しているのである。第一九〜二二連はがらりと調子が変わる——

while the imagination strains

かたや、想像力が

after deer

キリンソウの野を駆けていく

going by fields of goldenrod in

鹿を追い求める

the stifling heat of September

息苦しい九月の暑さの中で

Somewhat

それはどうでも

it seems to destroy us                    ぼくらを根絶しようとしている

らしい

It is only in isolate flecks that            何かが発せられる時は

something

きまつて

is given off

ぼつんぼつんとだ

No one

見定め

to witness

順応する

and adjust no one to drive the car        者もなく、その車を制御する者

もいない。

ここも解釈の分かれるところであるが、「息苦しい九月の暑さ」は、とりわけ、詩人という存在にとつての現代アメリカの社会状況を指していると解釈したい。それは詩人が生きにくい社会であるにとどまらない。「想像力が／キリンソウの野を駆けていく鹿を追い求める」一方で、その社会は「どうでも／ぼくら「詩人たち」を根絶しようとしているらしい」と詩人は怖れる。アメリカの経済至上主義は、詩人の息の根を止めようとしている。それに続く「何かが発せられる時は／きまつて／ぼつんぼつんとだ」は、詩の誕生のことを指していると思われる。多忙な医師ウィリアムズには、詩を書くためのまとまった時間はない。診察と診察の合間に、あるいは往診途中の車の中で、

短い時間を見つけて書くほかはない。一日二十四時間の中で、そういった詩が、例えば朝にひとつ、夕方にひとつと、「ぼつんぼつんと」(“in isolate flecks”) 生まれ出るのだ。最後の三行には、『春など』の他の詩(VIII, XIなど)と同じように、自動車イメージが登場する。この“no one to drive the car”とはどういう意味か。この“the car”が車そのものを指すのであれば、この詩句はまったく何の意味もなさないことは明らかだ。後の『パタソン』における産業主義批判を考えれば、この“the car”は産業至上主義的な現代アメリカ文明を指していると考えられる。がもつとも適当であろう。“drive”は「制御する」の意味に近い。人間が産み出したものでありながら、あたかも独立した生命を有するかのように振舞い始めた産業主義あるいは高度資本主義を、いまや制御できるものは誰もいない。それはドライバーを失って暴走し始めた車のごときものである。であればこそ、アメリカの機械文明と拜金主義を呪詛した「吠える」(“Howl”)の冒頭行「おれは見た。同じ世代の最良の精神が狂気によって破壊されるのを」(“I saw the best minds of my generation destroyed by madness.”)によつて、アレン・ギンズバーグは、同郷の先輩詩人ウィリアムズの冒頭二行「まぎれもなくアメリカが生んだ者たちが／狂っていく——」(“The pure products of America / go crazy”)に敬意を表することができたのである。

ところで、詩人にとって「息苦しい」現代社会に関して、ウィリアムズは最晩年に「習作」(“An Exercise”)と題された詩

を書いている。死後ピュリツァー賞を受けた『ブリューゲルの絵から』（一九六二年）に収録されている。気分がすぐれない四月のある日、友を訪ねた帰りの電車の中で向かい合わせに座った黒人について、詩人は次のように述べる——「ぼくは見えた／薄汚いカラーをつけた／どでかい黒人を／そのカラーが男の／巨大な喉元を／絞め上げているように／見えた／男がぼくを見たか／どうかは／わからなかった。男は／ぼくの／すぐ前に／座っていたが。どうすれば／ぼくらは／この現代という時代から逃げ出して／もう一度／息がつける／ようになるのか」<sup>20</sup>ここに言う「この現代という時代」から遠く離れた「もう一度息がつける」場所こそが、詩人にとって回帰すべき「神話」と「真正性」の在り処なのではなからうか。

ここで明らかに詩人は自分が感じる息苦しさを、カラーで喉もとを締めつけられている黒人に投影している。興味深いのは、黒人とインディアンの血が混じったエルシーが現代文明の犠牲者であるように、ここでも白人ではなく黒人が犠牲者を代表していることだ。これは単に、アメリカ資本主義文明が、弱者や少数者に犠牲を強いている事実を示唆しているだけではない。ウイリアムズにとつては、インディアンや黒人は、機械文明や資本主義文明とは対極にあつて、おそらくは「自然」や、人間の原初的な生活形態により近い存在としてとらえられているのではないか。だとすれば、ここにはかなり紋切り型の人種観が表われていることになる。それは、ニールセンが「黒人の女」

の中に見出したウイリアムズの人種観、すなわちマリゴールドの花束を持つて通りを歩くアメリカの黒人女性を「別の世界からやって来た大使」に見立てる彼の人種観と、まったく同じである。ウイリアムズは、生きにくい資本主義社会とは対極にある資本主義以前の社会について自ら作り出した神話を、電車で見えた黒人に投影しているのである。

## (二) 『パタソン』とジャクソン・ホワイツ

次に『パタソン』において重要な意味を持つニュージャージ北部の山の民ジャクソン・ホワイツを取り上げたいが、その前に、この詩の中では、黒人女性が、白人女性よりもはるかに大きく前景化されていることを確認しておきたい。以下にその例を列挙する——

(一) 第一巻第一節——ジャクソン・ホワイツに関する散文の直後に置かれた詩において、ドクター・パタソンは、かつて『ナショナル・ジオグラフィック』誌で見たある写真を思い出す——「思いだすのは『ナショナル・ジオグラフィック』誌の写真で、あるアフリカの酋長の九人の女が／半裸で、どうやら公式のものらしい／丸太に、頭を左に、またがついてゐる」<sup>21</sup>。実際の写真では妻の数は六人であり、丸太にもまた

がってはいないが、一夫多妻に変わりはない。第一巻冒頭には「男は都市に似ており、女は花に似ており／—たがいに愛しあう。女はふたり。女は三人。／女は数多く、それぞれが花に似ている」<sup>22</sup>という一節があるが、この女性たちには、白人は含まれていないか、含まれていても少数派である可能性がある。

(ロ) 第一巻第三節——診察室で若い黒人女がドクター・パタソンに言い寄る——「先生の赤ちゃんが欲しいんです、とその若い黒人の女が、／小声で、ベッドの横に裸で立ったまま言った。断ると彼女は／自分の殻に縮こまった。彼女も断った。わたし／あがってだめになるの、と言って、毛布で身をくるんだ。」<sup>23</sup>

(ハ) 第二巻第一節——ギャレット・マウンテン上の公園で、恋人に寄り添って寝そべるだけの「若い白人の女」とは対照的に、「野性的な」「三人の若い黒人の女たち」が登場する。<sup>24</sup>

(ニ) 第三巻第一、二節——一九三七年の短詩「パタソン、第十七挿話」(“Paterson: Episode 17” (CP 1 439-43))を再利用しながら、「美しいひと」(“Beautiful Thing”)と呼ばれる集団陵辱を受けた女性について、かなり長い言及が行なわれる。<sup>25</sup> そのなかで、ドクター・パタソンがこの女性に向って発する人種差別的とも取れる言葉「服を脱ぎなさい！／皮膚を脱げなんて／言ってるわけじゃない」<sup>26</sup>が、この女性の肌の色を暗示している。また、第三節の末尾ではドクター・パ

タソンが讚美歌“Brighten the Corner Where Your Are”を模して「美しいひと」に次のように呼びかける——「照らしだそう／いま／あなたがいる／一隅を！——炎よ、／黒いピロッドよ、暗い炎よ。」<sup>27</sup> 最後の部分がこの女性への言及であり、その肌の色を暗示していると考えない限り、この「——炎よ、／黒いピロッドよ、暗い炎よ。」は意味をなさないように思える。

(イ)(ハ)(ニ)については、既にニールセンが取り上げて論じている。しかしながら、外見上は黒人と変わらぬムラトール集団であるジャクソン・ホワイツについては、ニールセンはなぜか取り上げていない。あるいは、前述したように彼らが南部出身のアフリカ系アメリカ人を嫌悪していることが理由かもしれない。

さて、「パタソン」第一巻のジャクソン・ホワイツに言及した一組の詩と散文を見よう(P二二)。まず詩の部分においては、何箇所かが「エルシーに」と酷似している。「結婚がおどましい意味を／持つようになった」<sup>28</sup>は、異人種間の結婚が生み出すある種の意外の結果を暗示しているように読める。「叫ぶ代わりにほどほどにして——／西海岸に行って／失敗した者もいる——」<sup>29</sup>は、「エルシーに」の中の「まったくの冒険好きから／鉄道敷設に入れ込んだ／向こう見ずな男たちと——」<sup>30</sup>に対応している。「言葉を知らないでいるか／言葉を使う／勇気がな

い……／＼零落して／＼山に入った家族の／＼娘たちがいる。言葉がない。／＼たとえ心に激流を／＼見ることがあっても／＼無縁のままに終わる……」<sup>31</sup>は、山の民に「聾啞者」が多く、また山の民が自らの悲劇を「言い表すことはできない」という箇所を書き換えと思われる。この後に、ラマポー地方の「二つの側面」を記録したレディーメイドの文章が続く。ひとつの側面は、独立戦争中にワシントン将軍も訪れたことのある、美しい自然に恵まれたリングウッドである。もうひとつの側面が、それとは対照的な存在としてのラマポーの山の民である――

暴力事件がテネシーで起こった。インディアンによる虐殺事件で、絞首刑と追放刑が処せられた――絞首台の処刑を待つ者は六十人に及んだ。タスカローラ族は土地を離れることを強制され、「六族連合」の誘いで、アッパー・ニューヨークに出た他の部族と合流することになった。男たちはさきを行つたが、女や落伍者のなかで、サファン近くの峡谷の窪みからさきに進めない者が出てきた。それでかれらは山林に入り、そこでその集団に加わつたのは、イギリス軍から脱走したドイツのヘッセン地方兵――そのなかには白子が多数いた――それに逃亡ニグロ奴隷、そしてイギリス軍が撤収を迫られたあとニューヨーク市で釈放された多くの女とその子どもらだった。この女たちは檻に入れられていた――ジャクソンという名の男が、アメリカへの派遣軍に女を提供するというイギリス政府

との契約で、リヴァプールやその他の地域からさらってきた女たちだった。

混血はこの森林地帯で進み、「ジャクソンの白人」という一般名称がつけられた。(すでに黒人も混血していた。それは船一隻分の西インド諸島の黒人女であり、白人の女が、イギリスからの六隻のうちの一隻分海上で嵐に遭って沈没してしまつたとき、補充したものだ。ジャクソンはなんとかその埋めあわせをする必要があつたのだが、それがいちばん手つとり早く安い方法だった)。

この地域はニュー・バルバドス・ネックと呼ばれた。

クロムウエルは、十七世紀のなかごろ、アイルランド人の女と子ども数千人をバルバドス島に送って奴隷として売りわたした。他の男と結婚することを所有者から強制されて、この不幸な女たちのあとには数世代にわたつてアイルランド語をしゃべるニグロやムラートが続いた。そういうわけで、バルバドス島の原住民はアイルランド語訛りをしゃべるといふことがいまでもふつうに言われている。<sup>32</sup>

この散文中の「ジャクソンの白人」(ジャクソン・ホワイツ)に關する記述は、ラマポー地方に近いパーク・リッジ (Park Ridge) という町の新聞編集者ジョン・C・ストームズが、一九三六年に出版した『ラマポー山地のジャクソン・ホワイツの起源』(The Origin of the Jackson-Whites of the Ramapo Mountains)

という本に基づいている。ウィリアムズはこの記述を、ワシントン將軍のリングウッド訪問と同様に史実と考えている。ところがコーエンの『ラマポーの山の民』によれば、このストームズの本は、歴史というよりは伝説を記録したものであるらしい<sup>33</sup>。その根拠として次のような事実が挙げられている――

(イ) タスカローラ族は、ノース・カロライナでの戦争後北上し、イロコイ連合の第六番目の部族となった。しかし、移動は九十年間に渡って徐々に行われ、主なルーツはペンシルヴェイニアのサスケハナ川沿いであった。ラマポー地方にタスカローラ族がやって来たという確たる証拠は存在しない(7-8)。

(ロ) 「ヘッセン地方兵」すなわち逃亡ドイツ傭兵との雑婚についても証拠はない。一七七八年夏にニュージャージを行軍中に脱走した二三名のドイツ傭兵のうちで、記録に残っている姓は、今日のラマポーの山の民によく見られる姓(オランダ系)と一致しない(6)。

(ハ) ジャクソン・ホワイツの「ジャクソン」の由来については、アンドリユー・ジャクソン大統領説、トマス・J・ジャクソン(ストーンウォール・ジャクソン)將軍説、イギリス軍のジャクソン將軍説、ジャクソンという名の黒人奴隷説など、諸説入り乱れている(51-8)。

(ニ) ジャクソン・ホワイツという呼称の起源は比較的新しい

く、記録に登場するのは一八七八年が初めてである(11)。  
(ホ) ジョン・C・ストームズは勝手に話を作る(作り変える)ことで知られていた。彼は歴史家ではなく、ストーリーテラーであった(9-10)。

コーエンは、ラマポー山地出身のある情報提供者から、彼が一九二〇年代に聞かされた山の民の由来についての話を聴取しているが、それは一九三六年にストームズが史実めかして発表した由来と酷似するものであった。このことからコーエンは、ストームズは歴史ではなく、ひとつの「民間伝説」を記録したに過ぎないと結論づけている(10-11)。この民間伝承は、コーエンによれば、一八七〇年から一九二〇年までの間に作られた。

ジャクソン・ホワイツの名称の由来についてコーエンはいくつかの説を挙げているが、その中ではペンシルヴェイニア大学の人類学者フランク・スベックの“jacks-and-wives”が訛つたという説が最も有力であるように思える。解放奴隷は軽蔑を込めて“jacks”と呼ばれていたが、彼らがラマポー地方で寄る辺ない白人たちと交婚し始めると、“jacks-and-wives”と呼ばれるようになったのだという(12)。古い教会の記録をたどって調べた結果、コーエンは「ラマポーの山の民」が、オランダ統治時代の解放奴隷の子孫であると結論づけている(23-4)。初めはハッケンサク川流域にいたが、一八〇〇年頃からラマポー地方に移った(23-5)。インディアンとの混血があったとして

も、それはタスカローラ族とではなく、レニ・レナピ族との混血であつたらうとコーエンは言う(42)。

ウィリアムズのジャクソン・ホワイツに対する関心は、第一巻に留まらない。われわれは第四巻第一節に登場するドクター・パタソンの若い愛人フィリス (Phyllis) のアイデンティティを問題にせざるを得ない。なぜなら彼女もエルシーと同じラマポー地方の出身とされているからである。マッサージをアルバイトにしているフィリスは雇い主のコリドンの質問に答えて自分の出身地を言う―「あんな恐ろしいところであんた／＼どんな暮らしをしているの／＼ラ・チャー・モ／＼とこ言つたね／＼ラマポーです」(“What sort of life can you lead / in that horrid place / Raah-a-mo, did / you say? // Ramapo” [P 150-1])。その直前には次のような父親宛の手紙が「引用」されている―

#### 手紙

いい? いばりやの父さん、お酒をやめると約束しなきゃぜつたい家には帰りませんから。母さんのために帰れとかなんとか言つたつてだめ。もし母さんのことを考えたのなら、こんなことはしてないでしょうに。以前は父さんの一家である谷全体を持っていたそうじゃない。いまはだれが持つてゐるつていうの? 一度こつぱどい目に遭わなきゃだめなんだわ。

わたしはこの大都会で職業婦人として立派にやっています、エヘン! ほんとにここはお金がうなるほどあるの―手に入るかどうかの話で。父さんの頭と才能があればこれは父さんの楽しみにするはずなんだけど、やつぱりお酒のほうがいいのね。

わたしは大丈夫―アルコール中毒だからつてベッドでひと晩じゅう父さんの世話で格闘するのがいやなだけ。我慢できないの。父さんは強すぎて世話できません。だからどちらか一つに決めて―二つのうちの一個に。<sup>34</sup>

「谷全体」をかつて所有していたという表現は、少なくとも父親の代までは、ラマポー山中に暮らしていたことを暗示していると見なせる。人種的出自についての明確な記述はないから、読者は、フィリスをドクター・パタソンと同じ白人と思いがちだが、肌の色が薄いために白人として通る山の民の女性が、密かに想定されている可能性がある。なぜなら、フィリスについては、多少深読みすれば、黒人のステレオタイプを臭わせているように受け取れる特徴がいくつもあるからである。ひとつは、どうやらフィリスが「ダンス」が好きで、ニューヨークでプロのダンサーになることを志望していることであり、もうひとつはドクター・パタソンの観察によれば、フィリスはプロのダン

サーとなるには、腿が太すぎるとされていることである――「このドレス汗ぐつしより。／クリーニングに出さなくちゃ／ドレスは肩のうえまで持ち上げられた。／そのしたにはストッキング／太い腿……」<sup>35</sup>。腿が太いことは下半身全体が大きいことを暗示しているとも取れる。この特徴は「巨大な／不格好な尻」と表現されるエルシーの下半身の特徴や、「黒人の女」に登場する「でっかい／太腿で／よたよた歩く」黒人女性の身体的特徴に似通っている。

また、これはフィリス自身についてではないが、フィリスの友人の長身の色黒の若い女に関して、ドクター・パタソンとフィリスの間で次のようなやり取りがある――「あの鼻の長い、背の高い、色黒の女の子知ってる？／わたしの友だち。秋に／西部に行くんですって」<sup>36</sup>。これはドクター・パタソンの黒人女性への関心を暗示していると同時に、この女性がフィリスと同じラポールの山の民であることを仄めかしている可能性がある。ちなみに、第三巻第一節にはラポール山地出身と思われる女性について次のような言及がある――「ひとり奥地からの出で／ちよつぱりインディアンと／結核の気味あり／（腿に大きな傷あと）」<sup>37</sup>。そして、前述の第三巻第一、二節に登場する「美しいひと」と呼ばれる黒人らしき女性についてドクター・パタソンは「あなたは両脚を見せてくれた、鞭で（子どものころ）打たれた傷あとがあった……」<sup>38</sup>と述べている。邦訳『パターソン』の脚注において訳者沢崎順之助氏が指摘しているよ

うに、同じ太腿の傷があることから、この二人が同一人物である可能性もある<sup>39</sup>。また、「パタソン、第十七挿話」を再利用した第三巻第二節の末尾に、この「美しいひと」と呼ばれる女性のもうひとつの身体的特徴についての言及がある――「ただひとりのひと！／白いレースのドレスのあなた「瀕死の白鳥」腫の高い靴を履き―もともと／背が高いのに」<sup>40</sup>。すなわち、この「美しい」黒人女性は背が高い。とすれば、これも沢崎氏が指摘しているように、フィリスの友人である長身の色黒の若い女は、「美しいひと」と呼ばれる女性と同一である可能性がある<sup>41</sup>。ドクター・パタソンは、第四巻、第一節に登場するフィリスとだけでなく、その友人の「美しいひと」とも関係を持ったことになる。だとすれば、第三巻第一節の謎めいた「そう、ぼくはふたりの女の／出会う場所のようなもの」と、「そのふたつの色を溶けこませよ」<sup>42</sup>は、にわかにその意味を開示し始める。この二人がともにジャクソン・ホワイツすなわちラポールの山の民だとすれば、この山の民が『パタソン』のなかに占める重要性は、従来考えられていた以上に大きいと言わねばならない。ドクター・パタソンとふたりの女性との関係を示す記述は、ジグソーパズルのように『パタソン』のあちこちに散りばめられている。しかし、読者が、ばらばらになったピースを集めてつなぎ合わせるのに必要な最低限の手掛かりは（おそらく周到に）与えられている。これはウィリアムズの詩作法の一端を示していて興味深い。

フィリスとエルシーの類似に戻れば、フィリスとの会話の中でドクター・パタソンが第三者を指して「あの鼻の長い、背の高い、／＼色黒の女の子」という言葉を使っていることは、フィリスの肌の色が黒くはないことを意味しているように思われる。また、上に引用した「そのふたつの色を溶けこませよ。」も、「美しいひと」とフィリスの肌の色が違うこと、すなわちフィリスの肌が白いことを示している。フィリスがエルシーとよく似た特徴を持つていることが分かる。そして、フィリスも、上に引用した父親宛の手紙の第二段落に暗示されているように、エルシーと同様に、都市文明（資本主義）に対する免疫を持たず、やがてコリドンの性的誘惑に象徴される都市文明の魔の手にかかって、その純真無垢さを失っていくかも知れぬのである。

### (三) ウィリアムズと人種

第一巻第一節のジャクソン・ホワイトに関する散文に戻れば、その末尾にはラマポーの山の民とは一見無関係な散文断片が置かれている。マイク・ウィーヴァーによれば、この「クロムウエルは、十七世紀のなかごろ、」で始まる最後のパラグラフは、シェイマス・マコールが一九三五年に出した『トマス・モア』からの引用である。文中の「他の男と結婚すること」を「to mate with others」は、原典では「to mate with the negro slaves」<sup>(1)</sup>

なっているものを、ウィリアムズが書き改めたものらしい<sup>43</sup>。アイルランドを侵略したクロムウエルが、女や子供をバルバドス諸島に奴隷として売り払った、という記事である。この記事自体はニュージャージとは何の関係もないが、このパラグラフの直前に置かれた「この地域はニュー・バルバドス・ネックと呼ばれた。」<sup>44</sup>という（おそらくウィリアムズ自身の手になる）一文が、ラマポーの山の民とバルバドス諸島を結びつけることを意図しているようである。

ニュー・バルバドス・ネックとは、ハッケンサック川とパセイック川に挟まれ、ほぼ同じ地点でニューアーク湾に注ぐ二本の川の河口から北に七マイルの地点まで続く、およそ五千エーカー余の「細長い地域」(ネック)の古名である。より正確には、西はパセイック川、東はハッケンサック川右岸のハッケンサック湿地に挟まれた居住可能な地域である。ウィリアムズの住むバーゲン郡ラザフォードはその北端に位置する。一六六八年にバルバドス諸島のウィリアム・サンフォード大尉(船長)が、ジャージの不在領主であるバークリー卿とカートレット卿から購入したことから、この名がついた。

しかし、コーエンが指摘するように、ラザフォードを含むニュー・バルバドス・ネックとラマポーの山の民とは何の関係もない――

実際には、ニューアークの北のパセイック川東岸のニュー・

バルバドス・ネックはバルバドス諸島から来た入植者によって築かれた。だが、この地域がラマポーの山の民の先祖と関係があるという証拠はない。<sup>45</sup>

それにもかかわらず、なぜ強引に、ウィリアムズはこの二つの地域を結びつけるのか。共通項は、伝説に伝え、ラマポーの山の民にも、ニュー・バルバドス・ネックの住民にも、カリブ海の血が流れているということである。そして一九世紀末に両親がラザフォードに定着したウィリアムズにも、母方を通じて、カリブ海の血が流れている。

多くの作家がジャクソン・ホワイツの伝説に魅惑されてきたが、少なくともウィリアムズの場合は、彼の母親がプエルトリコ出身のクレオール(クリオール)であり、ユダヤ人を含む多くのヨーロッパ諸民族の血と、おそらくは黒人の血も自分の中に流れているかも知れぬという、多少の怖れを含んだ認識と関係があるだろう。

ウィリアムズの父方の系譜については、ウィリアムズ自身が述べているように、父ジョージの母親エミリー・ディキンソン・ウエルカムは孤児であり、ロンドンのゴドウィン家で育てられた。養父母の反対を押し切ってウィリアムズ姓の男と駆け落ちするが、詩人の父ジョージが生まれた後、男は女のもとを去る。祖母はこの男のファースト・ネームを生涯けつて明かさず、息子ジョージにも口止めた。そのため、今日に至るまで詩人

の父方の祖父については身元が判明していない。<sup>46</sup>

詩人の母エレナ (Raquel Helene Rose Holub) は、プエルトリコのマヤグエス (Mayaguez) 生まれである。その母親メリヌ (Meline Hurard or Jurrard) は、マルチニーク島出身のフランス系クレオールである。メリヌの父親は、エレナによれば生粋のフランス人で、私掠船の船長であった<sup>47</sup>。マリアーニによれば Hurard という姓はバスクの名前であり、ボルドーの出身であると<sup>48</sup>。マルチニーク島のサン・ピエールに残っていた親戚たちは、一九〇二年のプレー山 (Mt. Pelée) の大噴火で全滅している。

エレナの父ソロモンは、オランダ系セファード系ユダヤ人を先祖に持つプエルトリコ人であった。ソロモンの父はソロモンが少年の頃に死んだ。母はエンリケス (Enriquez) 姓の男と再婚し、たくさんの子を産んだ。ソロモンも成人するまでエンリケス姓を名乗った<sup>49</sup>。

一九九四年にプエルトリコ人の研究者ジュリオ・マーザン (Julio Marzan) が著した『ウィリアム・カーロス・ウィリアムズのスペイン領アメリカにおけるルーツ』(The Spanish American Roots of William Carlos Williams) は、フランス系を強調するポール・マリアーニを批判し、注目すべき新説を提出している<sup>50</sup>。マーザンは、『冬の下降』(The Descent of Winter) や『イエス、ミセス・ウィリアムズ』(Yes, Mrs. Williams) におけるエレナの言葉には、父方の先祖における人種混交を暗示するメッ

セージが、プエルトリコ人でなければ分からぬ形でコード化されていると主張する。まず、ソロモンの養父の姓エンリケス (Enriquez) は、スペイン語ではより一般的には Henriquez と綴られるが、この姓はプエルトリコにおいてはアフリカ系の血統と結びつけて考えられている。『冬の下降』において、エレナは父親ソロモンの異父弟について “But his half-brother Henriquez, there's plenty of that in my family...” (264) と述べているが、マーザンは、この曖昧な “of that” によって、エレナは、過去の人種混交を意味していると解釈する<sup>51</sup>。また、『イエス、ミセス・ウイリアムズ』には、エレナの父についての次のような記述がある—“Hoheb, the father, was of a first marriage and the half-brothers Enriquez were often in his hair.”<sup>52</sup>。マーザンは、これが単に、ホヘブ(ソロモン)にとつて異父兄弟がしばしば苛立たしい存在であった (“we were often in his hair”) ことを意味するだけではないと言う。プエルトリコでは、アフリカ系の血の有無は、肌の色だけでなく、頭髮の性質によっても判定されることから、ここでは異父兄弟たちに黒人の血が混じっていることが暗示されているのだという。(マーザンのこのあたりの論述はやや説得力を欠いている。なぜならエレナの父親の異父兄弟に黒人の血が混じっていることは、エレナが混血であることを当然ながら意味しないからだ。しかし、エレナの父方の家系は、何代にわたってプエルトリコに住み続けているか分からないほど古い家である。エレナの父にアフリカ系の異父兄弟がいるという事実

は、父方の家系のなかでは、過去にもそのような人種混交があった可能性を暗示しており、エレナはそのことをはっきり理解していたとマーザンは言いたいのであろうと推察される)。マーザンは、ウイリアムズも、このコード化されたメッセージを理解していたと述べている。つまり、現実に人種混交があつたか、なかつたかにかかわらず、少なくともウイリアムズは、自分のなかにアフリカ系の血が流れていると、漠然とはあれ、考えていたことになる。

ジャクソン・ホワイツとバルバドスを強引に結びつけようとした作者の意図に戻って、この稿を締め括りたい。ラマポールの「混血の」山の民に対するウイリアムズの好奇心は、自分自身の中に流れるカリブの血、言い換えれば家系の中の人種混交に対する関心を反映していると考えることができる。ウイリアムズは「神話」と「真正性」の淵源を、産業主義と資本主義以前の「無垢」の状態に留まっている(と彼が想像する)ラマポールの「混血の」民の中に見ていた。そして、彼は、自分自身の血の淵源であり、母エレナの記憶に残る「無垢なる田園」としてのカリブ海世界にも、同じ「神話」と「真正性」を見ていたのではないか、というのがこの小論のとりあえずの結論である。

44

- 1 Nielsen 72–84.
- 2 “A Negro Woman” (*CP2* 287)
- 3 “A Negro Woman” continues the notion of the black as an elemental figure that was earlier remarked in Stein. This woman is all physical motion, unreflecting, an “ambassador” from another world, unaware of her mission, a mission which requires the white poet’s presence to be made manifest. The other world which she presages is one of pretty margolds of two shades, and what is this if not another restatement of the theme Pound propounded with his preference for different “shades” in his landscape? The description of the bulk of the woman’s thighs causing her to waddle is evidently an example of Williams’s conception of “kaffir” beauty.” (Nielsen 77)
- 4 “...remained informed by the view of nonwhites as being ahistorical and without an art of their own.” (Nielsen 21)
- 5 “Stein’s narrative, like so much of white writing, strips black Americans of their history, their art, and their song, and then hears no answer from them.” (Nielsen 23)
- 6 “But Pound is often making use of the non-whites, and their speech, as local color for the landscape of his poems.” (Nielsen 68)
- 7 “the projection of white mythology into an imagined space of otherness” ; “a sort of prelapsarian encounter with authenticity” (Nielsen 81)
- 8 *CPI* 217–9.
- 9 Cohen, *The Ramapo Mountain People* 22.
- 10 Hurston 279–80.
- 11 Cohen, *The Folklore and Folklife of New Jersey* 34.
- 12 Beck 111–7.
- 13 Cunard 95.
- 14 “Many of them have exceptionally fine features. And the vivacity, the awareness in their manner is like nothing the white can offer. The American white girl today is shop-worn compared to the Negro girl—at her liveliest. All the simplicity of mind which “virtue” should imply lies with the Negro girl.” (Cunard 95)
- 15 “fairly vibrant with a sullen attentiveness” ; “her mental alertness coupled with her erectness, muscular power, youth, seriousness, her actuality—” (Cunard 95)
- 16 “made me want to create a new race on the spot. I had never seen anything like it.” (Cunard 95)
- 17 *CPI* 504.
- 18 “I can remember the terrible landscape one summer at Hilldale in Vermont; the half-wit Elsie, tall and white, bathing in the small stream at the bottom of the valley among the alders, and the men in the far field on the hillside stopping their haying to turn and look down at her.” (A 251)
- 19 “... the emblematic figure of “Elsie” is a “troubling insider” within the doctor-poet’s bourgeois domestic space.” (Lowmyer 69)
- 20 “I saw // a huge Negro / a dirty collar / about his // enormous

- neck / appeared to be / choking // him / I did not know / whether or  
not // he saw me though / he was sitting / directly // before me how  
/ shall we / escape this modern // age / and learn / to breathe again”  
(*CP2* 427-8)
- 21 尺璧 28: “I remember / a *Geographic* picture, the 9 women / of  
some African chief semi-naked / astraddle a log, an official log to /  
be presumed, heads left:”(P 13-4)
- 22 尺璧 18: “A man like a city and a woman like a flower / —who  
are in love. Two women. Three women. / Innumerable women,  
each like a flower:” (P 7)
- 23 尺璧 63: “Will you give me a baby? asked the young colored  
woman / in a small voice standing naked by the bed. Refused / she  
shrank within herself. She too refused. It makes me / too nervous,  
she said, and pulled the covers round her.” (P 32)
- 24 “the white girl” (P 51); “wild” (P 50); “3 colored girls” (P 50).  
25 P 98-9, 104-6, 110-1, 125-8.
- 26 “TAKE OFF YOUR / CLOTHES! I didn’t ask you / to take off  
your skin.” (P 105-6)
- 27 “BRIGHTEN / the cor / ner / where you are! / —a flame, /  
black plush, a dark flame.” (P 128)
- 28 “Marriage come to have a shuddering / implication” (P 11)
- 29 “Crying out / or take a lesser satisfaction: / a few go / to the Coast  
without gain—” (P 11)
- 30 “devil-may-care men who have taken / to railroading / out of  
sheer lust of adventure—” (*CP1* 217)
- 31 “They do not know the words / or have not / the courage to use  
them. / —girls from / families that have decayed and / taken to the  
hills: no words. / They may look at the torrent in / their minds / and  
it is foreign to them. . .” (P 11-2)
- 32 尺璧 27-8; P 12-3.
- 33 Cohen, *The Ramapo Mountain People* 10.
- 34 尺璧 265-6; P 150.
- 35 尺璧 289: “*Phyllis* & *Paterston* / This dress is sweaty. I’ll have /  
to have it cleaned // It lifted past the shoulders. / Under it, her  
stockings // Big thighs :”(P 163); “*Phyllis* & *Paterston* / I think I’ll  
go on the stage, / said she, with a deprecating laugh. / Ho, ho! //  
Why don’t you? he replied / though the legs, I’m afraid, would /  
beat you.” (P 166)
- 36 尺璧 298: “*Phyllis* & *Paterston* / Do you know that tall / dark girl  
with the long nose? / She’s my friend. She says / she’s going West  
next fall. / I’m saving every cent I / can put together. I’m going /  
with her. Haven’t told / my mother yet.” (P 167-8)
- 37 尺璧 197: “One from the backwoods, a touch of the savage / and  
of T.B. / (a scar on the thigh)” (P 111)
- 38 尺璧 225: “You showed me your legs, scarred (as a child) / by the  
whip.” (P 126)
- 39 尺璧 197.  
40 尺璧 227: “But you! / —in your white lace dress / “the dying

- swan” / and high-heeled slippers—tall / as you already were—...”  
(P 127)
- 41 訳書 298.
- 42 “Say I am the locus / where the two women meet”; “Let the col-  
ors run .” (P 111)
- 43 Weaver 202.
- 44 “New Barbadoes Neck, the region was called.” (P 13)
- 45 “Actually New Barbadoes Neck, on the east bank of the Passaic  
River above Newark, was founded by English planters from Barba-  
does, but there is no evidence that this region is related to the an-  
cestry of the Ramapo Mountain People.” Cohen, *The Ramapo  
Mountain People* 20.  
A 4, 166–8; Mariani 9,  
47 YMW 28.  
48 Mariani 15.  
49 YMW 30.  
50 Marzan 42–52.  
51 Marzan 49.  
52 YMW 53.

参考文献

【テキスト】

Williams, William Carlos. *The Collected Poems of William Carlos Williams*.

- Vol.I. Ed. by A. Walton Litz & Christopher MacGowan. New York:  
New Directions, 1986. (CP1 へ略記)
- . *The Collected Poems of William Carlos Williams*, Vol.II. Ed. by  
Christopher MacGowan. New York: New Directions, 1988. (CP2  
へ略記)
- . *Paterson*. Ed. Christopher MacGowan. New York: New Direc-  
tions, 1992. (P へ略記)
- . *Autobiography*. New York: Random House, 1951. (A へ略記)
- . *Yes, Mrs. Williams: A Personal Record of my Mother*. New York:  
New Directions, 1959. (YMW へ略記)
- . *Imaginations*. Ed. by Webster Schott. New York: New Directions, 1970.  
(I へ略記)
- . 沢崎順之助訳『バターソン』思潮社、一九九四年。(Paterson  
を引用する場合は、この邦訳を使わせて頂いた。ただし、  
一部言葉遣いを変えた箇所もある。)

【研究書他】

- Beck, Henry Charlton. *Tales and Towns of Northern New Jersey*. New  
Brunswick, NJ: Rutgers UP, 1964.
- Cohen, David Steven. *The Folklore and Folklife of New Jersey*. New  
Brunswick, NJ: Rutgers UP, 1983.
- . *The Ramapo Mountain People*. New Brunswick, NJ: Rutgers  
UP, 1994.
- Cunard, Nancy, ed. *Negro*. London: Nancy Cunard at Wishart & Co.,

1934. (二)の稀観本からのコピーを提供して頂いた一橋大学の  
新田啓子氏に感謝した。)

- Hurston, Zora Neale. *Folklore, Memoirs, & Other Writings*. New York: Library of America, 1995.
- Lowmyer, John. *The American Avant-Garde Tradition: William Carlos Williams, Postmodern Poetry, and the Politics of Cultural Memory*. London: Associated University Presses, 1997.
- Marzan, Julio. *The Spanish American Roots of William Carlos Williams*.

- Austin, TX: University of Texas Press, 1994.
- Nielsen, Aldon Lynn. *Reading Race: White American Poets and the Racial Discourse in the Twentieth Century*. Atlanta, GA: University of Georgia Press, 1988.
- Weaver, Mike. *William Carlos Williams: The American Background*. Cambridge: Cambridge UP, 1971.
- William Carlos Williams* [Video tape]. "Voices and Visions" Series. New York: New York Center for Visual History, 1988.